

府立大阪博物場と古銭貨章牌類資料

——実物科学博物館への進展をめざして——

久米 雅雄

一 はじめに

日本の博物館は、古代の正倉院宝庫や中世の公武の文庫、また近世の物産学や本草学の興隆に伴う実学資料の蒐集・公開などを素地とするとわれ、「宝庫」・「文庫」・「実学資料」などが蒐集され、保管され、公開されてきた。幕末の文久二年（一八六二）には、江戸幕府の遣欧使節一行の日記が記すように「Museum」に対応する「博物館」なる訳語が登場し、また福沢諭吉が『西洋事情』（一八六六—一八六九）の中で示すように「博物館ハ世界ノ物産、古物、珍物ヲ集メテ人ニ示シ、見聞ヲ広クスル為メニ設ルモノナリ」といった定義なども次第に明らかになるようになってきた。このような流れをうけて、明治四

年（一八七二）には文部省に「博物局」が設置され、またその翌年の明治五年（一八七二）には東京の湯島聖堂の大成殿が「文部省博物館」とされ、わが国における最初の博物館となった。

一方「府立大阪博物場」は明治七年（一八七四）に時の大阪府権知事渡辺昇が内務卿大久保利通に上申し、翌明治八年（一八七五）の四月九日に内務省の認可を得て設立された今でいう一種の「勸業博物館」のような公共施設であったが、その所在地は、現在、大阪商工会議所やマイドームおおさかなどが立ち並んでいる大阪市中央区本町橋あたり、江戸時代には「西町奉行所」、明治時代には初代の「大阪府庁舎」が置かれていた場所であったことが知られている（図1）。

そもそもこの「府立大阪博物場」の設立目的は「内外古今の物品を陳列し、歴代の沿革と現今経済の形状とを徴し、廣く衆庶の縦覧に供



図1 「府立大阪博物館」西門付近
 (『府立大阪博物館所蔵品目録』第一巻より)

し、知識を進め商業を競わしめる」ことにあったが、明治二十一年(一八八八)頃には「府立勸工場」や「教育博物館」、「動物園」や「図書館」、そして「美術館」などを含む「一大総合文化商業施設」として、府民の健全な娯楽やくつろぎの機会を提供する場所として大いに機能したようである。当時の「展覧会」に用いられたと思われる「記念印影」や「蔵品印影」の一部が現在も僅かながら伝存している(図2)。



図2 「第二回御臨幸・秘蔵品展覧會之印」
 および「府立大阪博物館蔵品」印

幣をはじめ、古代ギリシャ・ローマの貨幣を含む世界各国の貨幣、章牌類を一堂に取り揃えている。これらの資料は個別的に稀少で価値が高い逸品であるばかりか、系統的によく分類整理されており、今日、これだけの実物蒐集を行うことは最早不可能であると言われている。当時の蒐集者の意識はもとより、日本を初めとする世界の貨幣史や社会経済史、さらには博物館史の原点をたどっていく上できわめて貴重な資料であると高く評価でき

しかしその後の「富国強兵」政策強化の中で、ついに大正三年(一九一四)には「府立大阪博物館」は解体を余儀なくされてしまう。

ふたつの大きな世界大戦を経て、往時の所蔵資料の大半は失われてしまったが、そのような経過の中で、幸いにも保管・継承されてきた資料が「府立大阪博物館旧蔵古銭貨章牌類資料」一式である。箱は後述するように、第一号から第四号までの全体四箱(各十段)から成り立っており、日本・中国・朝鮮の貨

るので、資料調査や指定に関わった一人として、その概要を紹介しておきたいと思う。

二 「府立大阪博物館」以前の貨幣学

― 木村兼葭堂・浪花方圓堂・近藤守重・草間直方 ―

とは言え「『府立大阪博物館』旧蔵古銭貨章牌類資料」全体の紹介に入る前に、これらの資料の歴史的位置付けを正しく行い、またその資料的価値を適正に導き出すために、その前史を明らかにしておく必要があるかと思う。この点については平成十年（一九九八）に『府立大阪博物館旧蔵貨幣図録』第一冊（大阪府教育委員会）を執筆した際にも触れたけれども、「学史」として重要であるので再度登載しておきたいと思う。なぜならば「府立大阪博物館」にこれらの優れた古銭貨や章牌類が一堂に集積されて来たのにはそれなりの「歴史的な下地と必然性」が内包されていると考えるからであり、それは言わば「江戸」とは異なった「人」と「物」と「気」とを有機的に結合させる大阪固有の「風土」といったものが深く関係しており、しかもその同じ「風土」が現在もこの大阪に脈打っていると強く感じるからである。

「江戸時代の貨幣学」に関する著作としては、青木昆陽の『国家金銀錢譜』（宝暦八年＝一七一〇）や『錢幣略記』（元文四年＝一七三九）、新井白石の『本朝宝貨事略』（正徳五年＝一七一五前後）、芳川維堅の

『和漢泉彙』（寛政五年＝一七九三）、穂井田忠友の『中外錢史』（天保二年＝一八三二）などよく知られているが、ここでは特に政治・経済の中心地であった江戸と大阪の業績に注目しつつ、木村兼葭堂（一七三六―一八〇二）の『兼葭堂日記』及び『自傳』、浪花方圓堂（生没年不詳）の『尚古之部 骨董図彙』、近藤守重（一七七一―一八二九）の『金銀図録』、草間直方（一七五三―一八三二）の『三貨図彙』を採りあげることとする。

○木村兼葭堂・『兼葭堂日記』および『自傳』（図3）

木村兼葭堂は大阪北堀江の代々酒造業を営む家に生まれ、名は孔恭、字は世肅、別に巽斎・兼葭堂と号す。谷文晁描くところの「絹本著色 木村兼葭堂像 一幅」は本府所蔵の重要文化財の一であり、その生前の面影を伝える。『日本印人伝』によれば「博学多芸、書画篆刻を善くし、また物産の学に精し。もとより奇癖あり。収蔵頗る富めり。故に四方好事の士、来訪する者衆く、交道日に広し。兼葭堂の名、海内に聞えざるなし」とある。

『兼葭堂日記』は兼葭堂が四十四歳のおりの安永八年（一七七九）正月朔から六十七歳で亡くなる享和二年（一八〇二）正月十日までの長大な五冊から成る十八年間の日記である。水田紀久氏は「羽間文庫蔵 兼葭堂日記 解説」の中で「試みに本書をひもとかんか、年号にして明和・安永・天明・寛政・享和の五代二十余年にわたる浪華学芸壇の動向が如実に窺われ、ひいては当代文化交流の一大縮図を観るの感を深うする。文字通り風流好事の名に背かぬ兼葭堂主は、浪華の商人

坪井屋吉右衛門であるとともに、天下の聞人木村巽斎でもあった。その文庫が実のところ当代文化人たちの半ば公共図書館であり、かたがたサロンの役をも果たしていた」と述べておられる。

兼葭堂のこの「交友録」に登載された人々の中には「封侯・儒家・医家・詩人・書家・画家・印人・天文家・地理学者・博物家・本草家・蘭学者・異国の人」など「学芸万般の人士」が多数含まれていたことは周知のとおりであるが、兼葭堂自身が深い興味と関心を示した内外の文物として、「古物」・「書画」・「書籍」・「石」・「貝」などがあ
る。具体的には「竹林書屋ノ図」・「古筆」・「湖州筆」・「唐墨」・「猷之真蹟」・「大師真蹟」・「東坡真蹟」・「定家色紙」・「知不足齋叢書」・「四書」・「漢書」・「梵経訳」・「古器考」・「紫水晶」・「八代石玉」・「文具」・「琉球さんこ」・「鶏冠石」・「石瓦」、そして「古泉」・「新銭押形」などの類を『兼葭堂日記』から読み取ることができる。

そのほか兼葭堂の『自傳』にも「余嗜好ノコト専ラ奇書ニアリ。名物多識ノ学其他書画碑帖ノコト余微力トイヘトモ数年来百費ヲ省キ収ル所書籍ニ不足ナシ。過分ト云ヘシ。」とあり、また「其外収蔵ノモノ」として「本邦唐山金石碑本、本邦古人書画、近代儒家文人詩文、唐山人真蹟書画、本邦諸国地図、唐山蛮方地図、草木金石珠玉蟲魚介鳥獸、古銭、古器物、唐山器具 奇ヲ愛スルニ非ス専ラ考索ノ用トス蛮方異産。右ノ類アリトイヘトモミナ考索ノ用トス。他ノ艶飾ノ比ニ非ス」とあって『兼葭堂日記』と同様の趣向が記されている（なおこの直筆『自傳』は「巽斎翁遺筆」として初世暁鐘成によって『兼葭堂



図3 木村兼葭堂直筆『自傳』

これらの記述のうち特に注目すべきは兼葭堂の「古泉(銭)」・「新銭押形」等への関心である。「古銭ヲ愛スルコト」自体の流行は既に元禄年間には始まっていたが、それでは兼葭堂はいったいどのような仕方で「古銭」に接触していたのであろうか。

『日記』をひもといていくと天明六年(一七八六)十月二十日「奈良屋九郎兵衛 古泉持参」、同年十二月二十四日「奈良屋九郎兵衛 古銭持参取引」、天明九年(一七八九)四月二十三日「京葭ヤ町中立

雑録」に紹介されていたが、明治十六年十月に直筆『自傳』そのものが当の「大阪博物館」で展観され、そのおりに石版一枚摺りの模刻が参会者に配られたことが知られている。
とここで

売 土岐又兵衛 古銭ノコト始来、寛政五年（一七九三）五月十一日「昼後 南久太郎町井池西へ入 魚仁古銭会」、同年六月十二日「河内屋清左衛門来ル 新銭押形持参」、寛政六年（一七九四）十月五日「古銭ヤ甚右衛門」などの記述を見いだすことができる。

具体的にどの種の「古泉（銭）」や「押形」が兼葭堂のもとに到来したのかは定かではないけれども、当時、五十歳代の兼葭堂の周辺に奈良屋九郎兵衛・土岐又兵衛・河内屋清左衛門・古銭ヤ甚右衛門など新旧目利きの「古銭商ネットワーク」（ただし「古銭」だけを専門に取り扱っていたと考えるよりも、コレクターひとりひとりの関心に依りて「古董類全般」を手広く取り扱っていたにちがいない）がとりまいており、興味をひきそうな珍しい錢貨を入荷するたびに商品のディスプレイをおこない、また「古銭会」などを催して、この分野が好事家の間で大いに活況を呈していた様を知ることができるのである。

さいわい、兼葭堂没後まもない文化期の頃のものとして推定される書物の写しが、近年、大阪で発見された。中国からの輸入貨幣に関する資料も登載されており、参考になるので紹介しておきたい。

○浪花方圓堂『尚古之部 骨董図彙』全二冊（図4）

白丁氏所蔵の『尚古之部 骨董図彙』は六十六丁からなる着彩の二冊本である。それぞれの裏表紙には「浪花方圓堂」と墨書されている。巻・貳冊ともに中国から舶来したさまざまな銅器の着彩図を載せているが、第壹冊には爵・觚・尊・鼎・鐸・鐘・洗の類、第貳冊には鏡・弩・貨幣・帶鈎・銅劍・尺・銅印などの図が載せられている。その図

は模式図ではなく模写図である。第壹冊には『嘯堂集古録』・『塩鉄論』・『博古図』・『爾雅』などへの言及があり、原著者の学識の高さを彷彿とさせる。第貳冊には残念ながら図のみ登載されていて解説は付されていない。本書の成立年代については詳しくはわからない。けれども同書所載の篆刻印影（原金今）の年紀（甲辰・癸丑・丁丑）などから推して、天明・寛政・享和を経ての文化頃の写しと考える良いと判断している。



図4 浪花方圓堂『尚古之部 骨董図彙』全二冊

さて当時流入した貨幣資料の実相はどのようなものであったかということであるが、『骨董図彙』第貳冊を見ると「齊法貨」二点・「安邑二銜」・「次布九百」・「糸布二百」などの貨幣の図（いずれも表裏面を描き、緑の彩色を施している）と「貨泉」の「范母」の図を見いだすことができる。

これらの著述内容により文化年間の頃に中国から流入した貨幣の内容はどのようなものであったのか、当時の人々が特に関心を示した「古銭」の一端は何であったのかを具体的に知ることができるといえる。

「浪花方圓堂」をとりまく環境が果たして「奇ヲ愛スル」ことや「艶飾」にあったのか、それとも「考索ノ用」のためであったのか、それは収蔵家自身が答えを提出しているであろう。彼らが同時代に向かつて、あるいは後世にむかって、何を成し遂げようとし何を残したのか、その実績によって、彼らの趣向や歴史意識あるいは経世意識の水準とは判定される。

○近藤守重『金銀図録』全七冊(図5)

近藤氏は明和八年(一七七二)に江戸駒込に生まれ、名は守重、字は子厚、正斎・昇天真人と号した。江戸幕府の幕臣であり、特に寛政十年(一七九八)の蝦夷地巡察、寛政十一(一七九九)から文化四年(一八〇七)にかけての四度にわたる樺太から千島列島にかけての情勢探索は有名である。文化五年(一八〇八)に書物奉行となり、文化七年(一八一〇)に『金銀図録』を完成させている。文政二年(一八一九)に大坂弓奉行に転じたが、文政四年(一八二二)以降には閑居・改易を得て、文政十二年(一八二九)に五十九歳で病没している。

さて『金銀図録』であるが、本書はわが国古来の「金銀貨幣」を図録にして公刊した最初の本格的な書物とされる。書名としてはそれ以前のものとして青木昆陽(一六九八―一七六九)の『国家金銀錢譜』・『黄白志』・『寶貨録』等も知られてはいるが、「青木氏ノ撰ハ、真貨



図5 近藤守重『金銀図録』全七冊

ヲ以テ摸写セラレシナルベシ、其後ノ書ハ皆金銀錢譜ノ図ヲ又傳写シテ、真貨ヲ摺シモノトハ見エズ」とあり、史料価値はそれほど高くは評価されていない。

近藤氏の『金銀図録』は「黄表紙本」と「青表紙本」とが知られているが、通常全七冊から成り立っている。

白丁氏所蔵本によれば、その巻一は正用品上(四十品)、巻二は正用品下(九十二品)、巻三は甲州品(百三十三品)、巻四は各国品(百三十五品)、巻五は尚古品(七十三品)、巻六は玩賞品(七十品)、そして巻七は「金銀図録附言」から成り立っている。総計おおよそ五百五十品が記載されている。

「目録」序末尾に「文化七年(一八一〇)八月朔日 近藤守重識」

とあるので、脱稿はこの時期のものと考えてよいであろう。裏表紙見返しに「官許文政五年（一八二二）壬午十一月 発行文政六年（一八二三）癸未六月」と記された版本も発見されており、これにより刊行年を下降させる見方もあるけれども、草間氏の著作から文化八（一八一）年説を採ることも可能ではあるまいか。

内容については「凡例」からもわかるように、「図八神肖ヲ要ス」との立場から鑿刻（鑿痕や書体の）精度に留意するとともに「黄ナルモノハ黄金ナリ。青キモノハ白銀ナリ。…其彩色ナキハ図本ヲ以テ伝模シテ未タ真貨ヲ目撃セサルナリ。着色ニ濃淡アルハ陰陥陽起ヲ見スナリ」と述べて、金銀に黄青の色彩で区別を施したことや実査の無いものについては彩色を施さなかったこと、凹凸を着色の濃淡で工夫したことなどが述べられている。また『図録』作成のための原資料の収集については「真図ハモト諸家珍藏ノ真貨ヲ目撃手搦ス。一家ニ往テ四五枚ヲ見モノ有リ。一所ニ就テ数十枚ヲ獲モノ有リ。一貨ヲ三四搦スルモノ有リ。得ニ随テ綴緝比校シ以テ此図ヲ彙編ス。図成テ所蔵ノ名字ヲ記セントス。藏者明頭スルコトヲ欲セス。故ニ記セス」と記して、『兼葭堂日記』や『自傳』、浪花方圓堂の『骨董図彙』などの示す「愛古」・「好古」の精神にみちみちた諸家・所蔵家を訪ねて、膨大な「貨幣資料集成」にこぎつけた状況を記している。時折心なき人が「近藤氏の『図録』は単に所謂弄銭家の参考に資するに過ぎざる」と評する例を見ることがあるが、これは労なき人の、『図録』を読まざる人の、軽率な失言と言うべきであろう。巻一から巻六までの「図

及びその「解説」は精緻であり、かつ学識に満ちている。また巻七の「金銀図録附言」にも『日本書紀』や『古今集』の日本古典だけではなく、『爾雅』・『前漢書』・『後漢書』・『魏志』・『宋書』・『梁書』・『唐書』・『唐六典』・『金史』・『通典』・『明會典』・『天工開物』・『通雅』・『西清古鑑』・『夢溪筆談』・『天水冰山録』・『広東新語』など、中国諸書からの自在な援用もあり、しかもその視点は「通史的」・「歴史学的」・「経済史的」なものであった。「珠玉ハ恒ニ重ク刀布ハ恒ニ軽シ。唯金中ニ居テ穀幣ニ從テ高下ス。コレ金ニ相場ノ高下アルナリ。今上方ハ金ニ相場アリ。東国ハ銀ニ相場アリ。金違モ相場ヨリ生スルナリ」・「寛政七年愚崎港ニ在リ。乾隆六十年ニ當ル。清商費肇陽ニ問ケルニ費云銅錢ノ相場當時下直ノ所ニテ、一貫文ニ銀七匁八分八匁程ナリトイヘリ。是銀價漸々ニ貴ク」、「金銀ハ国家ノ重寶ニシテ財貨ノ精髓ナリ」、これらの表現は単なる「弄銭家」の言ではない。次に紹介する草間直方の『三貨図彙』へとつながる重要な著述であったのである。そのほか「凡例」冒頭には「図録ハモト寶貨通考ノ為ニ作ル。通考ハ歴代錢貨ノ輕重物價ノ低昂ヲ通觀シ、遂ニ併セテ金銀幣ニ及フ。図録ハコレニ副テ形製刻鑿ノ審ナルヲ通覽セシムルナリ。…通考三十冊 提要三冊 図録六冊」とあり、近藤氏には「金銀図録」のほかに『寶貨通考』・『寶貨通考提要』などの著作があったことも明らかであるが、未だこの書を見ないのは残念である。将来の登場を心から期待してやまない。

○草間直方…『三貨図彙』全四十四冊（図6）



図6 草間直方『三貨図彙』全四十四冊

鴻池本家へ出勤することになり、翌年には精勤を認められて、鴻池別家の一である大阪尼ヶ崎町の草間家に女婿として入った。以来、鴻池姓を名乗り、鴻池屋伊助として知られた。安永六年（二七七七）大阪の今橋二丁目の北側に間口六間半の屋敷を得、三十歳代初めの天明四年（二七八四）には新宅に移りすみ、また寛政三年（二七九一）には

草間直方は宝曆

三年（一七五三）

に京都の綾小路烏

丸で生まれ、のち

に大阪で活躍した

町人学者である。

字は子（士）徳、

幼名は仲我または

文次郎、名を直方

といったが、十歳

の頃、まず京都四

条山中家へ奉公

し、翌宝曆十三年

（一七六三）に大

阪鴻池家新田会所

へ転勤、安永三年

（一七七四）には

別宅を仰せつけられている。そして四十歳代後半の寛政十年（二七九

八）から享和元年（一八〇二）ころまでの「鴻池伊助」については、

先に挙げた『兼葭堂日記』の中でも、たとえば「寛政十年五月十四日

鴻池伊助来」とあるように「兼葭堂主人」との交友関係を記録してい

る（想像をたくましくすれば、『三貨図彙』の執筆開始は後述のよう

に寛政五〜六年頃には始まっており、前後して天明期から寛政期前後

に「考索ノ用」のために「古銭」収集をしていた兼葭堂の古銭を、草

間氏が実見していた可能性も想定しうる）。

五十歳代半ばの文化五年（一八〇八）になると自分家業を許され、

翌六年（一八〇九）には願いにより奉公御免となる。本家と同様の両

替店を開業するに至り、家業も隆盛となり、文化七年（一八一〇）に

は肥後藩と、文政期には豊後府内藩や多度津藩・田安家などとも取引

をおこない、他方で大名貸しに関する不法や藩債処理の実務など、諸

藩の財政整理などにも尽力して手腕を高く評価されることになる。文

政七年（一八二四）に家督を三男伊作直諒に譲り、悠々自適の生活に

入り、天保二年（一八三一）に七十九歳で没している。この間、懐徳

堂学主の中井竹山（一七三〇—一八〇四）や和学講談所の塙保己一

（一七四六—一八二二）ら多くの知識人と親交をもつとともに、『三貨

図彙』には中井竹山の序および皆川淇園の跋がある）、『草間伊助筆記』

六冊、『鴻池新田開発事略』三冊、『茶器名物図彙』九十五冊などの著

述にも富む。『夢の代』で有名な山片蟠桃（一七四八—一八二二）と並

んで、大阪町人学者の双璧と唱えられた人物でもある。

ところで注目すべきは『三貨図彙』である。この書は草間直方が寛政五（一七九三）～六年の頃に筆をとり、文化十二年（一八一五）に脱稿した二十年以上をかけて完成させた大著であるが、全四十四冊から成りたっている。その内訳は「目録・序跋」一冊、「三貨之部」二十冊、「物価之部」十冊、「附録之部」九冊、「遺考之部」四冊という構成である。原本は現在、大阪府立中之島図書館に寄託されている。

『三貨図彙』は基本的には先の『金銀図録』の成果の上に成り立っている。『三貨図彙』の「凡例」によれば「此書三貨図彙ト名ヅクルルヘンハ、金銀錢古今通行沿革ノ跡ヲアツメ、カネテ其図ヲシルスニ依リテ也、…モトヨリ本邦ノ事実ヲ専トシ、國史ノ文ヲアゲ、御當代ニ至テハ、御触ノ文ヲ載セテ、改造ノ年月、并ニ其時々ノ物価ノ高低等ヲ悉ク記シ、商家ノ幼稚ノ者通覽ノ便リトス」、「元禄・寶永年ノ頃、古銭流行セシカバ、珍錢多く偽鑄シテ人ヲ惑ハセシモ同事ニテ金銀ノ偽作モ又多カルベシ」、「文化八末年、東都近藤君金銀図録ヲ著シ、寶貨通考ヲ作ラル、先図録ナリテ是ヲ見ルニ、其図品金銀錢譜ニ載スル處悉ク盡セリ、其精密ナルコトヲ見テ知ルベシ、…依テ近藤君ニコヒ、印刻図品ヲ此書ニ顯ハシ、是迄傳寫ノ誤アルモノ悉省ケリ、物論ニオイテハ、少シク同異アルニ依テ、通考トハ齟齬ノコトアラシ」とあり、この書の編纂目的・近藤氏『金銀図録』の援用のこと・独自の所論の展開について記している。具体的な内容については、昭和七年（一九三二）に東京の白東社から出版された瀧本誠一氏校閲による『三貨図彙』、昭和五十三年（一九七八）に文献出版から（白東社版

を底本として）刊行された作道洋太郎氏解題の『三貨図彙』がそれぞれ出版されているので、ここで詳細は論じないけれども、いずれにせよ本書が古今に流通した「金・銀・錢」の「三貨」について、その沿革を詳述し、ひとつひとつ精確な貨幣図を掲げて考証を行い、物価・米価の高低、度量衡等について論述した画期的な「経済史書」（貨幣史・金融史・物価史・貿易史等に及ぶ）であったということは、明らかな事実であり、また評価である。

立論に先行しての貨幣の厳密な個別的資料批判、吟味された貨幣資料の材質別（錢之部・金之部・金之部・甲金之部・判金之部・銀之部）及び時代的配列、物価論や貨幣金融論の展開、食貨に対する政治の役割など、その内容は現代史的に読んでも極めて示唆に富むものである。例えば「資料批判」に関して言えば、『三貨図彙』「三貨之部」巻之十四の中に「元禄年ノ頃古銭ヲ愛スルコト専ラ流行シ…偽錢ヲ多く作り、人ヲ欺キ利ヲ奪イ、其作ノ巧ミナルコト、今以テ名ヲ残ス」、「金銀錢譜ナドニ習ヒ、好事ノモノ種々異形ノ金銀ヲ巧ミ出シテ、人ノ眼ヲ惑ハシム」、「又珍シキモノ犬吠レバ萬犬吠ルトテ、俗諺ノ如ク虚言ハ云ヒ勝チニテ、十ノモノ八九ハ實ナシ…真物ハ数少ク、疑シキモノ多カラン」、「適々眞物ト思フ品類出ル時ハ則模写シテ此図彙ノ據トス、又疑シキモノハ論ゼズ」とあり、また「食貨論」について言え、巻之十二の中には「食貨ハ、八政ノ第一ニシテ、治国平天下ノ根本ナリ、士農工商ニ到ルマデ是ニ心ヲ用ヒ、出入ヲ量リ奢侈ヲ戒メ、儉素ヲ守ラズンバ、必ズ安穩ニ永久ヲ保ツコト能ハズ」、「大阪ハ萬貨

ノ聚ル根本ノ地ニテ、諸相場ハ當地ヲ第一トス、…：治世ノ經濟、善政ノ美談、謹デ思惟スベシ」、また「物価之部」卷一の中においても「米価ノ高下モ金銀ノ融通モ、天理ノ自然ニテ人力ノ儘ニハ成リ難シ、…：元來相庭ハ商賈ノ私ヨリ起リ、公道ノ意ニヨラズ」、「摂津ノ地ハ、往古仁徳ノ御代其徳化ヲ慕ヒ、蕃夷ヲ始メ、萬民奉貢、海内ノ貨船、茲ニ入津ス、今以テ連綿トシテ、諸国交易ノ貨物相庭モ當地ヲ根本トシ、繁昌他ニ超エ、實ニ海内ノ府ト云ベシ」、「コレニ仍テ賈民ニ至ル迄、義氣凜々タル一癖アリテ、能人ヲ育シ財ヲ分、萬物ヲ交易シ、海内諸侯方ノ仕送りヲ初メ、臨時非常公私ノ用銀ニ至ルマデ、頼談ニマカセ、纔一紙ノ契券ヲ以テ、莫大ノ金銀ニ引替ルコト、武家ノ信約ヲ失ハザルハ常ト知リテモ、義烈ノ人氣コレナクテハ成シガタキ事也、故ニ自他ノ幸トナリ、金銀融通シ自然ト大阪ノ繁昌他ニ超エタルハ此謂ニテ、必ズ地理ノ然ラシムルニモアラス、大阪衰微スレバ海内ノ衰微トナル」とのべて、大阪の有する経済的地位と特色および大阪が全国経済に対して及ぼすその重要な影響力について論じている。

いずれにせよ「『府立大阪博物館』以前の貨幣学」のうち、本書が最高峰の一到に数えられることは間違いないところである。

以上、「『府立大阪博物館』以前の貨幣学」と題して、木村兼葎堂（一七三六一—一八〇二）の『兼葎堂日記』および『自傳』・浪花方圓堂の『骨董図彙』・近藤守重（一七七一—一八二九）の『金銀図録』・そして草間直方（一七五三—一八三二）の『三貨図彙』の内容を概観してきた。単なる弄銭家ではない、考索を意図し、歴史意識に富み、経

世意識の豊かな文人・町人・幕臣たちの情熱と労苦により、江戸時代に如何に高水準の「貨幣学」が築きあげられていたかが垣間見られたと思う。

三 「府立大阪博物館」蒐集の

「古銭貨章牌類」とその内容

（一）「古銭貨章牌類」の蒐集経緯について

さて「博物館ハ世界ノ物産、古物、珍物ヲ集メテ人ニ示シ、見聞ヲ広クスル為メニ設ルモノナリ」、あるいは「内外古今の物品を陳列し、歴代の沿革と現今經濟の形状とを徴し、廣く衆庶の縦覧に供し、知識を進め商業を競わしめる」目的をもって設立された「府立大阪博物館」は、明治から大正にかけてかなりの蒐集品を所蔵していたことが明らかとなっている。その全貌が目録として明らかにされるのは大正四年（一九一五）のことであったが、その中身については同年刊行の『府立大阪博物館所蔵品目録』全二巻に詳しい。第一巻には「書画之部」（佛画・土佐派・住吉派・狩野派・光琳派など）、「器具之部」（陶器・時絵漆器・楽器・玩具其他・文房具及几卓など）、「染色及装束之部」（織物・装束・臺灣服装など）、「雜種之部」（剥製・骨格・アルコール漬など）が登載されており、続く第二巻でも「古銭之部」（貨幣章牌類を含む）、「凶書之部」（書譜粉本類・有職故実・詩文など）、「印之部」（書畫・器具・圖書など）が要領よくまとめられている。これらのうち「古銭之部」には総計「二千六百二十八点」が登載されてお